Dīpavaṃsa とアショーカー王

佐々木 閑

私はこれまで幾つかの論文によってアショーカー時代の部派の動向に関して考察してきたが、その結果は次のような仮説に集約することができる。「アショーカー王以前にすでに部派は分裂しており分別説部、有部、法蔵部、化地部、大衆部などが独自の律を持って存在していた。(部派名が成立していたかどうかは不明)この時点での破僧の定義は *cakrabhedā* であり、教義の異なる者は共住できず、互いに相手を破僧者として非難する状態にあった。アショーカーの時これらの僧団を統一しようという動きが生じた。統一のために和合布薩が行われ、同時に破僧定義が *cakrabhedā* から *karmabhedā* に変更された。その結果、各部派の教義は食い違ったままでの形式上の仏教界統一が達成された。この動きに最も積極的であったのは大衆部であり、分別説部、法蔵部、化地部はこれに追随した。一方有部は初めこの動きに従わず孤立化の道を進んだが、後代になって統一仏教界に参入した。アショーカーは、この仏教界の統一を推進する立場に立っており、したがってアショーカーと有部は対立関係にあったことになる。」この仮説はアショーカー王碑文および、「アショーカー」「部派分裂」等の歴史的事件名に言及しない資料だけを用いて構成したものであるから、従来の研究で用いられていた文献資料の情報は含まれていない。そこで今後の作業として、私の仮説をこれらの文献資料に適用してみて、両者の合致状況を確認する必要がある。もし仮説が正しければ、それは各資料の基本的な枠組みと合致するであろうし、資料編纂者達の独自の立場を明確にすることもできるであろう。本稿では作業の第一段階として南伝の年代記 *Dīpavaṃsa* をとりあげ、私の仮説との比較研究を行う。紙数の都合上詳細な議論は別稿に譲らざるを得ないので、ここではその概要だけを記すことにする。

まず私の仮説が示すような事件が実際に起こったとした場合、その事件を分別説部がどのように解釈し、正当化したかをあらかじめ予想しておく必要がある。*Dīpavaṃsa* が分別説部の年代記である以上、それは分別説部を正統派とする立場で書かれているに違いないからである。

分別説部が上記の仮説で示されるような状況を歴史的に記述しようとした場

合、彼らは破僧定義がアショーカの時代に転換したことを素直に認めることはできない。律は原則として仏の直説であるから、その規定があとで一変したなどと言え、仏の権威を失墜させることにもなりかねないからである。破僧の定義は最初から *karmabheda* であったと主張しなければ彼らの律の権威は守れないのである。したがって分別説部がアショーカ時代の仏教を歴史的に語る場合、それに破僧定義の変更が明記されることはないはずである。

分別説部とアショーカの関係については、二つの異なった可能性が考えられる。一つは、分別説部は最初から破僧定義の変更を積極的に受け入れ、仏教界の統一を願っていたアショーカとは一貫して友好関係にあったという可能性である。つまり分別説部も大衆部と本質的には全く同じ動きをしたと考えるのである。この第一の可能性を認めるなら、分別説部はアショーカの考えに対して終始賛同していたはずであるから、彼らはアショーカを「僧団の和合に力のあった偉大な王」として無条件に称えるに違いない。破僧定義の転換には直接言及しないにしても、「アショーカ王の支援のもとで仏教世界が和合した」という事実を強調するはずである。そして他方、この統一に参加しなかった有部を破僧教団として強く非難するであろう。一方、『摩訶僧祇律』に見られる破僧定義の変更に対する積極的な姿勢を、大衆部独自のものとして重視するなら別の可能性が生じてくる。この場合、分別説部は大衆部と違って本来破僧定義の変更による形式上の部派統合には賛成していなかったが、大衆部にひっぱられてしぶしぶこれを認めたとことになる。最初、分別説部が破僧定義の変更に対抗していたとすると、彼らは破僧定義の変更を積極的に主張する大衆部およびそれを支援するアショーカとは対立する立場にあったことになる。彼らは本来自身たちだけが正統な仏教教団であり、その他の部派は異端者であると考えていたであろう。それが外的な圧力によって態度を変え、しぶしぶ破僧定義の変更を受け入れると、今まで異端であると考えていた他部派の説も正統な仏教の教義として認めざるを得なくなった。また、対立状態にあったアショーカを、それまでとは逆に、仏教界統一の主導者として称えねばならなくなったであろう。

このように、形式上はアショーカの側に立ちながらも、内心自分たちだけを正統であると考えていた分別説部が歴史書を編纂するとすれば、二とおりの書き方がある。一つは、自分たちの正統性には目をつぶってアショーカに迎合する形で歴史を記述する方法である。この場合には、分別説部と大衆部が同一の歩調をとったとする先述の可能性と、外見上は全く同じ内容になるであろう。

これに対して、もしも分別説部があくまで自己の正統性を主張し、和合布薩による仏教統一を一過性の災難の如くに考えていたとすると、歴史書の内容は随分違ったものになる。仏教界の統一は分別説部にとって一種の災難であり、そのような災難に遭遇しながらも自分たちの教説を守り抜いた分別説部の権威性が強調されるはずである。その場合、自分たち以外の部派の扱いはいささか面倒なものになる。仏教界が統一される前の時点では、他部派の者たちは紛れもない破僧者であり、非仏教徒であるとみなすことができた。しかし破僧定義の変更によって仏教界が形式的に統一されると、彼らはもはやその存在が否定されるような破僧者ではなく、単に分別説部とは異なる教義を唱える別個の部派ということになる。新たな破僧定義に従えば、たとえ異なる教義を主張しているものであっても、布薩の共同執行を認めていればそれはすべて正統仏教教団なのだから、もはや彼らを破僧者として非難することはできないのである。このような状況に置かれながらも分別説部だけが正統仏教であることを強く主張するためには、何らかの主観的解釈が導入される必要があるだろう。つまりこの場合は、何らかの歴史の改竄が行われる可能性が高いのである。

Dīpavaṃsa 第七章の第三結集記事は、異なる源泉に含まれていたと思われる二つの伝説がそのまま並置された形をとっている。(伝説1は第34～43偈、伝説2は第44～59偈)このうち伝説2が私の仮説とよく対応し、伝説1はその改変態であると思われる。伝説1について述べる余裕はないので、ここでは伝説2に焦点をしばって考察する。伝説2の問題点、疑問点は次のようなものである。

1) 第45～47偈は、アショーカの多大な布施によって仏教僧団の利得が増大したことを語る。これはその直後の第48偈で六万の賊住者が利得を求めて僧団に侵入したことの理由を示すための記述である。賊住者とはニセ比丘のことであり、そのニセ比丘が仏教教団の利得につられて侵入したのである。ところが第54偈以下で説明される外道は「上座説」に背く分派であり、誤った説でブッダの言葉を汚す者とされている。これはニセ比丘ではなく、むしろ仏教内の異端者を指しているように思える。このように伝説2の前半では仏教外から金品目的で侵入したとされる外道が、後半では一転して仏教内部の異端者として扱われている。この矛盾はどう説明すればよいのだろうか。2) 第49偈が意味するのは「アショーカの大臣が、分別説部の比丘たちと外道たちが一緒に布薩を行うよう強要したのに対し、分別説部がそのような布薩の執行を拒否したため彼らの中の幾人かが殺された」ということである。アショーカと分別説部が対立関係にあったことを暗示

するこの出来事は何を意味するのか。3) 第49偈で問題になった布薩儀式がその後実行されたのか、それとも取りやめとなったのかが明示されていないが、これはなぜか。4) 第52偈では、モッガリプッタがアショーカの罪を許しているが、この記述は何を意味するのか。5) 外道たちを打ち負かすためにモッガリプッタが作った Kathāvatthu は現存し、その内容は分別説部以外の仏教部派の説を論駁するものである。しかし上記の1で指摘したように伝説2全体では外道の意味は一貫していない。このような曖昧模糊とした伝承によってその成立状況が説明されている Kathāvatthu が、実際には仏教諸部派の主張に対する批判書として厳然と存在しているという事実はどう説明しうるのであろうか。そして分別説部以外の仏教部派の教義を批判している Kathāvatthu が、なぜ外道の説を打ち破るための書といわれているのであろうか。6) 第56偈の後半には「モッガリプッタが Kathāvatthu の作成によって行ったような異説の破壊、打ち負かしは〔以後〕存在しない」とある。この部分は何を意味しているのか。7) モッガリプッタの主催によって開かれた第三結集は、分別説部の資料にしか現れない事件である。なぜ分別説部にだけ第三結集の記録が残っているのか。

以上七つの疑問点は次のように解釈することができる。分別説部は和合布薩および破僧定義の変更による仏教界の形式的統一に反対の立場をとっていたが、外的圧力に屈してしぶしぶそれに従わざるを得なかった。しかしこの状況を歴史的に記述しようとする Dīpavaṃsa において和合布薩への参加を明示することはできない(問題点2,3)。したがって仏教内部の異端者達を後に正式な仏教部派として承認するに至る経過を説明できず、単に異端者との布薩の共同執行に分別説部が反対したという点で記述を打ち切らざるを得ない。ところがそうすると *karmabheda* の定義により自分たちが破僧者ということになってしまうため、異端者は賊住者であって布薩に参加する権利がなかったという理屈を創出した(問題点1)。そして自分たちが外的圧力に屈して和合布薩に参加することによってアショーカとの確執を回避した事実を、別の形で表現した(問題点4)。仏教界の統一によって異端説が正式な仏教として流入してくることに危機感を持った分別説部は、緊急の策として異端説を論駁するための Kathāvatthu を製作し、自説の確認のための第三結集を行った(問題点5,7)。その後 *karmabheda* を受け入れた部派では、異端の説を唱える者を外道として非難することはなくなった(問題点6)。

〈キーワード〉 アショーカ, Dīpavaṃsa, Kathāvatthu

(花園大学助教授)